

ヴォーリズの建築 —建築デザインの視点から—
山形政昭

はじめに

ヴォーリズの建築について色々耳にされていると思うが、この写真のような赤瓦の「かわいい家」には一般の方も興味をもち、また親近感を感じるものがあり「一般受けする建築」と言われる。実際相当たくさんの建築を残していて、キリスト教主義の近江ミッションを営むという履歴など、いろんな意味でユニークな建築家に違いない。ジョブリストから作品が 1,400 くらい知られているが、全て出来たわけではなく増築など様々あり、実数は 700 くらいだと思っている。

ヴォーリズ風の建物はあちこちにあり、「これもヴォーリズだろうな」「ヴォーリズに違いない」ということで見に来てくれと言われるが、一概に違うとは言えず「ヴォーリズテイストですね」「ヴォーリズ好みかな」といった建物に良く出会います。これは本物ですが宮崎県の土々呂という町の建物で、ジョブリストでは「TODORO」という地名だけが記されていた。延岡に近い小さな港町であることが偶然わかり、現地を訪ずれると残っていました。今はリノベーションされ人気の雑貨店となっている。役場の方もやってこられて、本当にヴォーリズ建築ならば町のシンボルにしたいと熱心に対応頂いたことがあった。ヴォーリズは、フランク・ロイド・ライトやアントニン・レーモンドといった建築家なら絶対に行かないようなところにも行っている。ヴォーリズの建築は、一般の方に大変親しみ感をもたれる。それは F.L.ライトは世界的な建築家だが、日本には 5、6 棟残しているだけだ。けれどもヴォーリズは、住まいや生活のための環境を基本とした建築の計画性に特色があり、小住宅はじめとして多くの建築を残した。

ヴォーリズについて

彼は 1880 年生まれでブルーノ・タウトと同年で、関西で知られる建築家の安井武雄、渡辺節は 1884 年生まれ、同時代に活躍したレーモンドはヴォーリズより 11 歳若い。ライトは 1868 年の生まれでヴォーリズのほうが 12 歳若い、ライトが初めて来日したのが 1905 年で、ヴォーリズとライトは同じ年に初来日している。つまり、ライトからレーモンドの活躍に重なって、ヴォーリズの時代があった。

1910 年から建築活動を開始し、ヴォーリズ合名会社を作る。合名会社の活動は建築が主だが、産業部がありアメリカ製ピアノや塗料、家具、メンソレータムなども輸入販売していた。並行して 1911 年に、「近江ミッション」というキリスト教団体を起こし湖畔伝道を行った。ヴォーリズはよく宣教師とかミッション建築家と言われるが、専門の神学や教育学を修めたわけではなく、熱心なクリスチャン伝道者であった。そして 1920 年にヴォーリズ建築事務所という名前を掲げる。建築作品集を 1937 年に刊行しているが、同じ出版社から発行されたレーモンドの作品集の方が 2 年早く、また 2 年後に安井武雄作品集も発行されている。つまり、ヴォーリズはあまり建築界に知られていなかったと言われるが、そうではなかったかもしれない。ただ戦後モダニズムの中でヴォーリズが忘れられていたことは間違いない。

明治 45 年、近江八幡に事務所の建物を建てている。日本の瓦葺の町家を参考にした 2 階

建ての道路に面した建物だが、今は残っていない。2階の窓の開けかたが引違窓だが縦長窓のように開けていたのが目についた。「アメリカ式スタイルではこんな風に開けるのか」と、40年になります。ヴォーリズの研究を始めた頃に感動した。その頃は、まだ近江八幡に所在する近江兄弟社建築部が続いていた。その年に、会社が倒産して間もなく建物も撤去されてしまったが、私が行った時には2階の設計室には製図台が並んで残っていた。大丸の設計や重要文化財となった神戸女学院の設計も、かつてこの部屋で行われたのだと想像した。

建築活動の3つの特色

建築活動という意味で少しまとめると、要点を三つにしぼることができる。まず、「コロニアル」「スパニッシュ」などのアメリカの伝統的建築スタイル。コロニアルは開拓地の建築という意味でアメリカに限ったことではないが、日本のコロニアルというのは、ヴォーリズあるいは西村伊作が、アメリカの住宅を日本に伝道した流れがベースにあり、アメリカの伝統様式の応用といった面がある。もう一つは、彼の夏の軽井沢での活動。キリスト教の伝道活動という意味もあったかもしれないが、根っこに自然志向がある。18～19世紀のアメリカには自然派と呼ばれる文化があり、森の中の生活といったものを重視している。ライトも都市生活よりも郊外、郊外よりも原野、草原を求めるといった流れに位置しており、そうしたアメリカの精神を受け継いでいる。三つ目が生活からの視点である。合理的精神で、実際の生活にどのように生かすのかという目的意識があった。

このスライドは、1913年に近江八幡にアメリカ式の住宅を戦略的に建てたもので、「近江ミッション住宅」という。増築されているが、今もこの環境のままほぼ残されている。竣工の3年後、『湖畔の声』という雑誌で紹介したことで見学者が絶えなかったという。この住宅を紹介すると、いわゆるコロニアルスタイルは箱型で切妻屋根がのるシンプルなものだが、玄関ポーチとベランダまわりにクラシックな装飾をつける様式である。アメリカ式の初期の建物で彼が主張する3要素は、この吉田邸において明確に見られる。第一は設備が整ったキッチンで、大きな窓があり、流し、レンジなど進んだ台所を積極的に作っていること。二つ目は2階のベッドルームで、ベッドを置く場所がスリーピングポーチと呼ばれるサンルーム風になっている。南と西に大きな窓があり、夜も朝も通風がよい。彼は、野外の空気と一緒にベッドルームを置くのがいいと考えていた。日本は寒暖の差が大きい、それにめげず自然の中に寝室を置き健康なライフを送るという考えであった。しかし、実際は難しく、広いベッドルームに改装されてしまった。それでも、スリーピングポーチというものを実験的に行っていたことがわかる。もう一つは階段踊り場に設けた広いバスルームがある。1913年という時期を考えると、住宅の近代化という意味ではかなり早い。住宅改善同盟会ができた、アメリカやの商品住宅ができた、関西でも箕面の住宅博覧会が開催されたのが1920年近くで、かなり早く近江八幡で純度の高い近代化されたアメリカ式の住宅が作られていることがわかる。アメリカ式の住宅ではあるが、面白いのは2階に日本間があることである。日本間には床の間があって違い棚がある。吉田邸には、ヴォーリズの教え子である吉田悦蔵とお母さんが住んでいて、そのお母さんのために8畳の和室を入れ込むという柔軟な工夫をしている。その建物はその後4度の増築を経ながらもよく残っている。丁度100年を超えており、長寿命に住むにはどうしたらいいかをよく教え

てくれている住宅である。

プロテスタントイズムを言い換えるとピューリタニズムだが、当時はより純度の高いピューリタニズムの生活が言われていた頃だった。例えば、家政学で著名なキャサリン・ピーチャーの『家政経済論』という本が1841年に出ていて、ピューリタニズムの生活思想が様々書かれている。その内容が健康・簡素さ・合理性で、住宅の中を整理していつでも素早く対応できるようにすることがピューリタンの務めだということであった。熱心なピューリタンは家の中を綺麗にしなければいけないと、アメリカにおいて広まった生活思想だったようである。そうした流れをヴォーリズは引き継いでいる。それを唱えたのが「ドメスティシティ」という思想で、キリスト教の主婦は効率よく住宅を運営して綺麗に保たなければならない。そのためには伝統だけでなく最新技術を導入する必要があると考えられていた。コロニアルスタイルという伝統様式はシンプルなデザインと自立性を表現するために、ある種風格のある構えをしていた。同時に健康的で新しく、進歩的な設備にも関心があったと思われる。そうした源を探るとヴォーリズより100年くらい前の18世紀末ごろ、バージリアあたりにたくさんできたコロニアルハウスがある。バルーンフレームという工法で、外壁はシングル、屋根もシングル、内側は漆喰を塗っている。根太天井という表現がシンプルで力強く、大きな暖炉を家の中心とする独立住宅であった。

軽井沢での活動

コロニアルを自然志向に従って実践していったのが、軽井沢の建築である。1912年につくられたヴォーリズのオフィス兼山荘だった。設計は板張りの割丸太造りの建物で真壁式になっている。2階が設計室と彼の逗留のための部屋で、1階は合名会社のお店があった。ここでは、アメリカ製の塗料を主に販売していたらしい。

同時代に、YWCAの大きなコテージ・ハウスができた。ダイニングがコーナーに設けられ、YWCAコテージなので数家族が共有で使う施設である。野性味のあるインテリアで、リビングには荒々しい石造りの暖炉、工法は木造の真壁式で杉の板張り、家具は面白くて竹を使った東洋的で個性的なものを使っている。自然味の濃い建物である。このような軽井沢でのライフには、ただ簡便な住まいというだけでなく、新しい住宅に求めるものがあったのではないか。そのことを現代だからこそ考えてみたいという思いがあり、ヴォーリズの建築に関心が集まっている背景ではないかと思う。

軽井沢には、ヴォーリズ夫妻の山荘が90年ほど前に建っている。「九尺二間の家」とヴォーリズ自身が名づけた。九尺二間とは長屋住まいのことをいい、最小限住宅のことである。全体が三間×三間くらいの9坪でポーチとトイレがついて10坪弱くらいの建物である。広間の全体でも20畳弱くらいの建物である。この小さな素朴な住まいでヴォーリズは全てのできるのだと、10人くらいのお客も呼べるのだと述べている。コンパクトな住まいを楽しむということを、この軽井沢の山荘に絡めてよく言っていたようだ。この建物は残され、浮田さんという画家夫妻が戦後所有して、今は80代のおばあちゃんがひとり住んでいる。この建物の展示を、2008年に草津の滋賀県立美術館と東京の汐留ミュージアムの「ヴォーリズ展」で行い、大変話題になった。何が一番よかったか見学者に聞くと、10坪の軽井沢の山荘の実物大模型がよかったという。日曜美術館でも取り上げられて、広く知られた。最小限の住まいでありながら、楽しいシンプルな住まいが強い印象を残した。広

間には簡素ではあるが作りつけのキャブボードと本棚がついている。手作り感がありながら機能性の面でも十分な心遣いが、ヴォーリズのデザインのポイントである気がする。

家具

アメリカで 19 世紀の後半から 20 世紀の初め、アメリカのクラフトマンシップ家具が流行する。福島教会は現存しないが、近江八幡の住宅より 3 年ほど早く、彼が八幡商業学校に勤めているときに設計した建物である。この教会の椅子のこのような造形は、アメリカのアーツ&クラフツだと思ふ。アーツ&クラフツでは、ウィリアム・モリスやボイジーといった英国のアーツ&クラフツがよく研究され著名であるが、やがてアメリカに渡り機械の応用を経て普及したといわれている。つまり業態として広まるが、あまり評価されなかった。ようやく近年になってアメリカで関連本の出版が種々あるようだ。例えばこの写真の長椅子はグスタフ・スティックリーのデザインで、シンプルな板、丸鋸で切りだした板で、背もたれから腕、脚、それをひとつのラインで作ってしまう簡素で合理的な、アメリカクラフトの典型といわれるものです。こちらは、クラフツマンワークショップのメンバーの一人ハーブ・エリスの作です。こうした 20 世紀初頭のクラフツ運動の状況をヴォーリズはよく見ていたのではないかと考えています。

近江八幡に行かれる方がよく見学する建物で、1931 年建築の一柳ヴォーリズ記念館、旧ヴォーリズ邸がある。彼の住宅には、玄関に腰掛けの長椅子がよく置かれる。先ほどと同じようなデザインで、外観はモルタルスタッコ塗の白い壁に 2 階が下見板張りという構成で、アメリカのアーツ&クラフツに位置づけられるマルガートの作品に類例の有るデザインである。F.L.ライトは天才的個性を持っているが、やはり類例があるのではないかと思う。そういう米国の流れをヴォーリズはくんでいるのではないかと思う。

ヴォーリズの住宅

これは京都の駒井家住宅で昭和初期の典型的なヴォーリズの住宅です。所有者から日本ナショナルトラストに寄付され、公開活用が熱心にされている。学生に、「ヴォーリズの建築は友人宅に行くつもりで訪ねて、ゆっくりしてぼんやり見るのが一番いい」とよく勧める。そうすると「ハイランクな別世界だと思っていたのが、全然違ったすごく優しく身近な空間に思えた」と、学生も言う。ヴォーリズの住宅はこういう雰囲気が多い。明治の西洋館とか、あるいはライトの作品で知られているのは超豪華な大邸宅が多く、日本にはライトの山邑邸があるが、プランニングからしてもかなり特殊な建物が多い。それに比べて駒井邸はリビングルームを中心とした近代住宅の典型のような間取りで暖炉もない。暖炉がない代わりに、出窓に長椅子を置くという場面を作って家の中心にしている。さらにサンルームもこじんまりしているが、これがあることによって家にゆとり感を持たせている。

ヴォーリズの住宅の特徴は三つにまとめられる。スパニッシュの和風化、それから出窓が多い。出窓の活用。この建物も全体はこういう総 2 階箱型である。けれども、こちらにも出窓があるし、東面にも出窓がある。玄関ポーチそのものにも張り出した扱いとか、そういう基本は四角いボックスだけれどもそこに少し空間や要素を付け加えて、膨らみを持たせるという出窓の活用。それから間取り中心としての階段がある。そして六畳の和室が用意されていて、家の中に居ながら和室に来るとちょっと離れに来たような感じで、大

変ゆとり感を持たせるスペースになっている。ベッドルームについているサンルームで寝るといのはなかなか大変みたいだが、寝室には日差しがどんどん入ってくるサンルームを積極的に推奨していたのだと思う。

ヴォーリズの住宅で知られている一つにヴォーリズ六甲山荘がある。小寺家の山荘だった建物で、南側の開放的な建具のデザイン、それから南に出っ張ったテラス。これらが個性というか、住まいを豊かなものにしてている。決して特殊なデザインではないが、暖炉の煙突が中心に立ち上がっていて、暖炉を囲む広場があり、ヴォーリズの住宅観がよく理解できます。

代表的建築

1930～35年にかけて作品集を飾る多くの建築が生まれている。とりわけ1933年は、大丸とか神戸女学院といった代表的な建物が相次いで竣工した年であった。つまり昭和初期には、日本での建築経験を踏まえて日本の生活環境や生活者の要望に対応して、様々なものを組み入れた、ヴォーリズのいう総合的な設計を特色とした時期でありました。

またヴォーリズの建築作品では住宅とミッションスクールの建築が仕事の90%近くを占めていた。学校も、学生や教員にとって生活の場であり、生活の場をたくさん作ったという意味で、生活感のある仕事に恵まれたのではないかと思う。この関西学院は開校80数年を迎えているが、当時の学生数は1200人ぐらい、現在は2万人以上に増えている。このキャンパスグリーンの辺りだけは、当初の雰囲気を持して関西学院の伝統を語っている。そしてキャンパスの中心に大学の中心を担う図書館や講堂を置くという計画が特徴である。日本の官立学校の場合には一般的には講堂あるいは時計台が来るが、ミッションスクールは図書館とか教会堂がくる。

スライドはアメリカのジェファーソンが200年ほど前に作ったバージニア大学で、アメリカの伝統的キャンパスの原点と言われている。図書館が中央にあり、各学部の建物が個別に並んでいて、それぞれの建物をコリドーが繋いでいる。こういうキャンパス全体を自然の中に設けた村というイメージで作られており、アカデミックヴィレッジというが、その構成原理で関西学院はプランニングされている。神戸女学院も関西学院の流れで、共通点をたくさん持っているが、種々の要素が混在したデザインである。スクラッチタイルのやり方はライト風で、ロビー邸を想わせる。それから柱型とフリーズ装飾など古典的デザインが入っていて、ルネサンス様式ともいえる。ヴォーリズ自身、神戸女学院の図書館は「イタリアン」だと言っている。ベースはスパニッシュだが、スパニッシュにイタリアンが入っているというわけだ。イタリアンとかスパニッシュなど西洋のものは切妻が多いが、ここでは寄棟型で少し軒の出がある。「少し日本のお寺っぽい」と私が言うと、「確かにそうですね」とか「正倉院に似ている」とか説明しますが、そういう和風にも馴染むスパニッシュであることに気付く。そういう様々なものを調和させ違和感のないハーモニーというか、神戸女学院スタイルにまとめたところがヴォーリズの技量だったと思う。

図書館2階の閲覧室は根太天井の構成で、本来は全部木材でやるデザインなのだが、それを鉄筋コンクリートでやってペインティングしている。構成はスパニッシュスタイルだが、閲覧テーブルとか書棚がとてもヒューマンサイズである。こじんまりしているという意味ではなくて、居心地の良いデザインだと思う。家具もしっかりデザインされていて、

椅子の背もたれを見ていただいてもわかるが、実用的だけど部分的なデザインもとてもいい。手で持って移動するときを持った感覚がいい。空間もそうだが、椅子も使うと心に残るものを与えるデザインだと思う。

ヴォーリズの作品集にある言葉なのだが「古典系を選択し、これに近代的改善を施せるもの」とある。古典的な様式は応用して使うけれども、それをいかに用途に対応させてかつ空間的、歴史的なものをまとめ上げていくか。応用型の設計であるということだ。「応用型」という言葉をヴォーリズ自身が述べている。

大丸は、ネオゴシックスタイルと言われる。ゴシックと言うとパリのノートルダムがあるが、そういう入り口の構えだ。ゴシックの大聖堂はこういう大きなエントランスを持っている。それをアールデコ風にアレンジしている。塔があり、北側が少し高くして南側はわずかであるけれども、一応双塔となっている。ゴシック風の細部の様式を活用しながら、商業建築としての合理的な処理をしている。外観もいいけども店内もよくて、これは残したいと思っている。この天井の照明装飾が有名で、木漏れ日の雰囲気だ。森をイメージしている。森の枝葉から落ちてくる木漏れ日をデザインしている。そこに鷹など鳥のデザインが天井周りについている。こういう森の空間を応用したデザインになっている。ステンドグラスは大丸にもあるが、イソップ童話のツルとキツネの物語で、こちらはわらびのようなアールデコ・デザインとなっている。

ヴォーリズのスタッフ

この写真は1930年少し前のヴォーリズの設計スタッフの写真で、中心にいるダンディな青年がヴォーリズで、他の米国人スタッフもいる。大工の棟梁らしき人もいます。少年もいれば外国人も何人かいる。ヴォーリズの事務所は、25人前後を擁している。近江八幡は地方の町だが、これだけのメンバーを擁して、鹿児島から函館まで日本全国に活動を広げていた。そういうことがどうして可能だったのか謎だが、定礎式とか竣工式など色々の写真もあり、ヴォーリズはかなりまめに現地に行っていたようだ。設計の実務は彼を囲んだスタッフが担っていた。京都工芸繊維大学の前身である京都高等工芸学校昭和2年卒業の豊田さんという技師や早稲田の卒業生とか、様々なところから近江八幡のヴォーリズを目指したメンバーがいた。大丸の設計主担当だった左藤久勝という技師が、大丸の仕事のさなかに自邸を作っている。スパニッシュというか、丸太づくり風の自然味のあるロマンティックな住まいで、ベンチシートがあって、こじんまりしたダイニングルームで、大丸で使う予定のペンダントがここに残っている。佐藤さんは大丸の建築のさなかに風邪をこじらせて40歳ぐらいで他界する。非常に惜しまれる方だった。

まとめ

ヴォーリズの建築スタイルとデザインは、コロニアルとかスパニッシュとか、アメリカのアーツ・アンド・クラフトとかが源流として挙げられる。そこから導かれる生活のための健康な環境とか、自然味のあるものとかにヴォーリズ思想が見出せるのであり、様々な要素をうまくまとめられて、住空間を作っているといえます。そして、例外的作品に大丸などニューヨークのアールデコ風のタイルやテラコッタ、ステンドグラスなど応用した近代デザインを試みたものがあり、都市建築として成功を収めている。

ヴォーリズ事務所には、松ノ井覚治という有力なスタッフがいた。かつて進路の相談にヴォーリズのところを訪ねて建築がやりたいと言ったところ、まだ若いからちょっと勉強したらどうかということで、早稲田に入り、同期生の村野藤吾と出会っていた。卒業に際して教授であった内藤多仲の進路指導を受けたところ「村野さんは自由な設計を実践したらいい」「松ノ井覚治はアメリカへ行ってさらに勉強したらいいよ」と言ったらしく、松ノ井はアメリカに行き、ニューヨークで活躍しながら、ヴォーリズとの関係もあり大丸や村野さんのそごうの設計にも彼は絡んでいた可能性があります。帰国後は勿論ヴォーリズ建築事務所で活躍した。そうした所員の動きも、ヴォーリズ研究では見逃せないと思っている。